これまでの『霊供養入門』第三章の分析から明らかになるように、谷口が説いた教説は、中絶後の救済よりも無意識的に受胎した子供や優生学的に淘汰されるべきとされる子供への受容に焦点を当て、また、優生学的・経済的な理由ではなく、倫理的・霊的な観点から妊娠中絶について考える必要があることを強調するのである。これは生長の家の優生保護法反対の立場に位置付けられるものであった。一方で、婦人のノイローゼや子供の非行といった当時の「社会問題」も取り上げられ、流産児の供養をそれらの「社会問題」の解決方法として挙げられることで、戦後の「社会問題」に関する言説との連続性が考えられる。

現代ニッポンの妊活と中絶
――子安神社葦船社の事例から――

渕上　恭子

平成二一（二〇〇九）年に創建一二五〇年を迎えた八王子の子安神社（東京都八王子市明神町）は、（同社の由緒によれば）天平宝字三（七五九）年に橘右京少輔命（たちばなうきょうしょうゆうのみこと）が淳仁天皇から皇后の安産祈願の命を受けて創建した、八王子最古の神社として崇敬を集めている。日本神話において、自ら産屋に火を放ち、燃えさかる産屋の中で火照命、火須勢理命、火遠理命の三人の子を産んだと伝えられている木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）を主祭神とする子安神社は、安産・子授け・子育ての御利益のある八王子のパワースポットとされていて、妊活（子作り）に励む人々の信仰を集めている。

木花開耶姫命のパワーにあやかり、「健康で元気な赤ちゃんに出会える」ことを願って、妊活に勤しむ人々が方々から子安神社にやって来る一方で、同社には、妊娠中絶をした人々が「水子の鎮霊」をしに来る葦船社（同社の末社）があることが知られている。

元々、安産・子授け祈願を行う子安神社では、流産・死産した子の慰霊を行うことはなかったが、「水子供養ブーム」が起こった一九七〇年代に「安産・子授け祈願だけではなく、水子の慰霊もしてほしい」という要望が数多く同社に寄せられるようになった。そのような人々の要望に応えて、昭和五三（一九七八）年に同社の拝殿裏に葦船社が鎮座された。

葦船社には、伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）の最初の御子として誕生したものの、骨のないぐにゃぐにゃした蛭のような形状で（今で言う、障害を持って）生まれたために、葦船に乗せられ、幽世に流された日留子命（ヒルコノミコト）が御祭神として祀られている。その御神徳により、不運にも現世の恵みを受けることのなかった「水子様」を幽世で守ってくれる日留子命に、妊娠中絶をした人々が、「水子の鎮霊」を祈願している。

葦船社には、「水子」を乗せて幽世に流す「葦船」とともに、「水子の御守り」と、「水子」へのメッセージが記された「水子鎮霊絵馬」が奉納されている。葦船社の御祭神の日留子命が、障害を持って生まれたために幽世に流された故事が、同社を訪れる人々の心に響くのであろうか。それらの「水子鎮霊絵馬」

に記されたメッセージには、胎児に障害があることが判って中絶を選択した（と推測される）人々の心情が綴られたものが見受けられる。障害があると判った子を中絶した人々は、その子を産んであげられなかったことを詫びて、かけがえのない「わが子」として葦船社に祀り、末永くその子の「成長」を見守っている。葦船社は、親に産んでもらえた子も、産んでもらえなかった子も、分け隔てなく慈しんで育ててもらえる、もうひとつの「子育ての空間」になっているのではなかろうか。

子安神社に奉納された「健康で元気な赤ちゃん」が生まれてくるよう願掛けをする夥しい数の「子授け・安産祈願絵馬」を見ていると、同社で妊活をする人々が、「障害のない子」を産まなければならないという重圧を感じていて、健康な子供が産めなければ「自己責任」を問われることを恐れていることがうかがわれる。

子安神社葦船社の事例から、「健康で元気な赤ちゃん」を妊娠し出産することを念じて、子安神社で妊活を行う人々が、妊娠した子に障害があると判ったら産まないことを選択し、葦船社で「水子の鎮霊」を行って、中絶した子を弔うという、現代ニッポンの妊活と中絶の実相が浮かび上がってくるように思われる。